# 家庭礼拝のために

2025年1月19日

律法は、信仰によって義とされるために、わたしたちをキリストに連れて行く養育掛となったのである。

ガラテヤ人への手紙３章２４節

| | |
|---|---|
| 黙　　祷 | |
| 讃 美 歌 | １９７ |
| 主の祈り | ９３－５A（讃美歌21 P.146） |
| 讃 美 歌 | ２１０ |
| 聖　　書 | ガラテヤ人への手紙３章１５節～２９節(新約聖書P.２９６) |
| 祈　　祷 | |
| 使徒信条 | ９３－４A　（讃美歌21 P.148 ） |
| 讃 美 歌 | ２８０ |
| 奨　　励 | 「主のもとへ」 |
| 讃 美 歌 | ４３０ |
| 頌　　栄 | ２４ |

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

奨励〔要約〕

異邦人の多いガラテヤ地域ですが、パウロの伝道によって教会が生まれました。この地での伝道の様子には「十字架につけれらイエス・キリストがあなたがたの目の前に描き出された」(3:1）とあり、福音の啓示が明らかでした。パウロが去るとユダヤ人教師が訪れ、律法の重要性を教えたのです。人には自分を高めたい、何かをしたいとの願望があり、彼らは律法を守ることに力を入れ、信仰から離れてしまったのです。パウロはガラテヤの人たちに、アブラハムの名をあげ、律法か、信仰かと迫りました。アブラハムは神様に喜ばれるように働いたのではなく、神様の約束を信じて義と認められたと強く訴えました。約束は土地の所有と子孫（いのち）に関するもので、神様から一方的に与えられた恵みの賜物なのです。律法は、神様の選びの民の上に神様の知恵と知識を示し（申命記4:6)、私たちに為すべき事、避けるべき事を教えています。しかし、私たちが律法を行うことによって、自分の義を求めるなら、罪を自覚させ（ローマ3:20)、死に導く（ローマ7:10）ものとなるのです。律法に忠実だったニコデモも、富める青年も、パウロも、人々から尊敬される人たっだと思います。彼らは、律法に従っても安息も喜びもなく「なんというみじめな人間なのだろう」(ローマ7:24）心から叫び、救いを求めたのです。律法は人を救うことも、命を与えることもできません。パウロは、律法には「すべての人を罪のもとに閉じ込める」、「監視する」、「キリストに連れて行く養育掛」の役割があると教えました。罪のもとに閉じ込めるとは、イエス様の十字架の贖いが成就するまでの囲いのようなものといえるでしょう。神様が選ばれた羊たちは、囲いの中で、悪の満ちた世からを守られているのです。囲いの中には、羊を養う御言葉によって、自分の力では打ち勝つことのできない気性、悪意、高ぶりなど、私たちの内に潜む肉の性質を教えるのです。養育掛は主人が信任している奴隷が担う仕事です。主人の子を学校に連れて行き、家庭教育もしていました。囲いの中で羊たちは、律法に心を探られ、自分には為す術がないことを示されますが、ただ主を信じることで、律法からも解放され、神の子となり、確かないのちの経験をするのです。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。（Ｉテサロニケ５：１６～１７）